

# 夏目漱石とクラシック音楽

(第20回)

## ユンケル家と岩倉家の結婚

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

大正元年12月1日は、アウグスト・ユンケルにとって、自らが育てた東京音楽学校のオーケストラのタクトを振る最後のコンサートであった。3月号で触れたように、夏目漱石は寺田寅彦と小宮豊隆を誘い、待ち合わせの方法まで細かく決めて出かけた。その翌日の12月2日、津田青楓（画家）に宛てた手紙のなかで、漱石はこんな自嘲的な言葉を吐いている。

……もう小説がせまつてゐるので、娯楽は一寸出来ません。然しまだ二回しか書きません。それでゐて音楽会など杯に行きます。(12月2日付、漱石の手紙)

封筒の消印を見ると、12月2日の「午後1～2時」である。「行人」の新聞連載が始まったのは、12月6日なので、この時点で、まだ2回分の原稿しか書いていなかったことがわかる。しかし、焦りの気持ちよりも、ユンケル「送別コンサート」を聴きたいという気持ちの方が勝ったということであろうか。

夏目漱石は1867年2月9日（旧暦1月5日）生まれ。ユンケルは出生証明書（ご遺族から提供）で確認すると、1868年1月28日生まれ。二人はわずかに一歳違いである。漱石には、同世代の外国人の華やかな活躍が気になったのかもしれない。

さて、「送別コンサート」を無事に終えたユンケルは、妻子を連れて祖国ドイツに帰り、アーヘ

ン音楽院の教授となった。

ユンケルには、1903年（明治36）に築地のカトリック教会で結婚した日本人の妻がいた。ノブ夫人の父親は仙台藩主伊達侯爵の家臣であった。ノブは1872年に仙台で生まれたが、向学心に燃えて上京して、築地の神父から英語を学んだ。二人の出会いは教会にあったのである。理知的で控えめ、しかも欧米の文化や生活様式に強い好奇心を持つノブに、ユンケルは惹かれた。1906年（明治39）、長女ベラが誕生。1909年（明治42）には、次女マリオンが誕生した。二人とも聖路加病院で産声をあげている。ドイツに帰国後、三女エルナと長男オトが誕生。オトは夭折した。

ところで、長女ベラが長じて結婚した相手が、岩倉具視ともみのひ孫、具方ともかたであった。画家志望の岩倉具方がパリに行くために乗っていたシベリア鉄道の車中で、偶然にベラ・ユンケルと出会った。二人は音楽と美術と日本のことで盛り上り、具方はパリ行きを一旦やめて、ドイツで結婚したというから、なんともドラマチックである。二人の間は長男、具一ともかずはドイツで生まれ、次男の具二はパリで生まれている。

岩倉具一氏は医者としての本業の傍ら、ユンケルの業績を真摯に調査されていたが、惜しくも2002年に他界された。三恵子夫人はご健在で、私はとても親しくさせていただいている。